

長浜城再興30周年

（博物館を支える市民力）

天下統一を果たした秀吉公の出世城として知られる「長浜城」。

再興以来、長浜のシンボルとして威風堂々たる姿を誇示し、たくさんの人々を惹きつけてきました。

この市民の「愛城（情）」を長年支え育ててくれたのは、「長浜城歴史博物館友の会」の皆さんです。



地域博物館としてのこだわり

昭和58年当時の長浜城歴史博物館には、観光施設としての「城」を見学するために多くの観光客が来館していました。しかし、専門学芸員を有する施設としては『地域博物館』としてのこだわりがあり、「お城の形をした博物館」として、市民との関わりを深める取組みの一つが「友の会」の設立です。

昭和60年「友の会」設立と展開

長浜城歴史博物館友の会（会長・吉川兵衛）は、博物館開館2年後に設立。当時の会員数は100人余り。考古や歴史、民俗などに関心を寄せる人が集まり、古文書、人物、美術工芸、考古・民俗の4部会を設け、毎月研究活動を行うほか、秀吉公や長浜ゆかりの地への臨地見学会、歴史講座などで、学びを広げていきました。

「友の会」の支え

「友の会」が、会のあり方として『ボランティア活動の重要性』を明確に示したのは平成元年のこと。展示解説、会報誌『友の会だより』の発行・発送、来館者の接遇、学芸補助、周辺清掃など、「みんなの博物館」をめざし、ボランティア活動を展開。また、講演会や見学会も、事業に参加するというスタンスから、会員自ら参画・実行するものへと姿を変えていきました。

こうした活動を通して、博物館を全国へと発信。現在の会員数は約700人を数え、「友の会」の活動が博物館の運営と発展を支えています。

市民主導のまちづくりの礎を築いた長浜城

長浜のまちを拓いた豊臣秀吉公の遺徳を偲ぼうと、市政40周年を前に、長浜城を再興する動きが盛り上がりました。きっかけをつくったのは、故長谷久次さん（神照町）と故長谷定雄さん（京都市）兄弟でした。民俗資料館を建設する構想があることを耳にし、「できることなら、お城型の施設に」と、昭和55年3月、2人で1億5千万円もの大金を寄付。これが呼

び水となり、企業や個人から約4億3千万円もの尊い浄財が寄せられ、再興にかける市民の共感がうねりを起こし、気運が一気に高まりました。開館記念の長浜出世まつりを契機として、市民主導によるまちづくりが活発化し、昭和から平成にかけて全国に誇れるまちづくり活動が、市民パワーにより次々と展開されていき、現在に至っています。



建設中の長浜城



1 来館者へ展示解説を行うため、学芸員から資料の説明を受ける会員
2 会報誌「友の会だより」の発送作業 3 臨地見学会の様子(南魚沼市 坂戸城跡 友の会提供)